

「の」と「な」の連体修飾構造

An Adnominal Modification of “no” and “na”

京谷美代子*

Miyoko Kyoya

Abstract:

The proper use of “no” and “na” as an adnominal modification is generally determined by the part of speech of the modifying element. However, both may be possible and sometimes finding a clear difference in meanings between the two is not easy. There is some element of freedom in deciding which one to use.

More recently, we can see an increase in the productive usage of modification using “na” such as “otona-na jikan” (adult time) and “kyaria-na hito” (career person). This is likely because the original nouns are given “context.”

キーワード:

連体修飾、「X の N」、「X な N」、「の」と「な」のゆれ、属性

I. はじめに

「都会の人」「ニュースの時間」の「都会」や「ニュース」は名詞であり、主要部の名詞「人」や「時間」を修飾する。また「重要な会議」「静かな午後」の「重要」や「静か」は、従来の国語学でいう形容動詞の語幹である。つまり名詞句の連体修飾の「の」と「な」の使い分けは、一般的に前項の品詞によって決定されるといえる。

しかし、「正式 { の／な } 許可」「ふざろい { の／な } 食器」などの場合は、「の」「な」両方の使用が可能であり、両者にはっきりとした意味の違いを見出せない。このように「の」と「な」の決定にはゆれがあるといえる。さらに最近では「大人な時間」「キャリアな人」という従来にはなかった用法も見られる。

本研究では、この「の」と「な」の機能を、

名詞や形容動詞の形態的また意味的側面から考察し、「X の N」「X な N」、および「N が X だ」との関係の分析を試みた。また「の」と「な」の使い分けはどのように行われているかアンケート調査¹⁾をし、さらに従来は見られなかった「大人な時間」のような「な」についても、10年前(2008年)との比較を試みた。²⁾

II. 研究の方法

本稿では「の」と「な」のゆれについての論文を文献レビューした後、「の」と「な」のどちらかの形が他方に先行しているのか、または共時的に共存しているのかを特定の語彙項目ごとに検討するために複数のコーパスを用い、コーパスから抽出した実例をデータとして分析する研究方法をとった。研究対象

*佐野日本大学短期大学 日本語別科 非常勤講師 Sano Nihon University College Lecturer (Part-time)

のコーパスには「青空文庫」³⁾「KOMATSU」⁴⁾を用いた。また必要に応じて、インターネットからの用例も用いた。さらにアンケート調査を行うことによって、「の」と「な」の使い分けの検証を試みた。

Ⅲ．先行文献

3-1 桜井光昭 (1964)『「名誉の」と「名誉な」』⁵⁾

「ことばのゆれ」として述べられている。個人的傾向とするものがあるとする一方、一般的傾向があるものの例として「無・非・不」などを冠するもの、「最」を冠するもの、副詞の語形があるものなどにゆれが多いという。また明治・大正時代には多くみられた「一的の」⁶⁾という表現が、昭和30年代には「一的な」に移行しているのではないかと指摘している。

3-2 加藤重広 (2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』

<第2章・形容動詞か名詞か>では、連体修飾の形態として「の」が現れるものを「連体ノ形」、「な」が現れるものを「連体ナ形」と呼び、「連体ナ形」は「健康な人」のように属性を表すとする。一方「連体ノ形」は、属性を表すものとそうでないものが混在するとしている。また<第8章・修飾機能と実詞の体系>では「連体ノ形」を絶対形容⁷⁾・相対形容という観点から限定的な「の」と叙述的な「の」に分けてその意味機能を論じている。

3-3 村木新次郎 (2005)『「神戸な人」という言い方とその周辺』『表現と文体』

名詞であった単語が「一な」の形式に支えられて形容詞の用法をもつようになり、この品詞の転成で実体から属性へと意味の変化をもたらすとする。「一な」形の使用例文を、実体と属性に分け、多数挙げている。「ゆれ」については、さまざまな要因が錯綜していると述べている。

3-4 福田有美 (2005)『日本語否定接辞と漢字造語力考』

日本語では文法範疇はとりあえず「名詞」があり、それを使用時に使用したい形式の文法範疇に変化させ、文法範疇の決定は語形成のあとから行う」と述べている。「京都なお店」の「京都な」は、「日本の古都である京都のイメージの典型」を表すため、「な」という「辞」を付加するという考え方である。「名詞+な」で「京都な」という「形容名詞」を作り、属性を表すという。

Ⅳ．コーパス検証

「NがXだ」と「XなN」を比べ、下表(1)～(4)'のように、同形ではあるが構造的・成立方法が異なる「XなN」が、数種類あるのではないかと仮説をたて考察した。

表1の分け方の基準：

①「会議が重要だ」は連体修飾形「重要な会議」があり、「*重要な会議」の形を

表1 「NがXだ」と「XなN」

	NがXだ	XなN	XのN	調べる語の例
①	会議が重要だ	重要な会議	*重要な会議	重要、曖昧、穏やか
②	お姉さんが美人だ	美人なお姉さん	美人のお姉さん	美人、問題、普通
③	*笑みが満面だ	満面な笑み	満面の笑み	満面、とっておき
④	*人が神戸だ	神戸な人	神戸の人	神戸、大人、田舎
④'	*人がスキルだ	スキルな人	*スキルの人	スキル、キャリア、携帯

持たない。「連体ナ形」があり「連体ノ形」が無い。

- ②「美人なお姉さん」は「美人のお姉さん」と言い換えができる。意味は殆ど変わらない。また「お姉さんが美人だ」と言える。
- ③「満面な笑み」は「*笑みが満面だ」という表現がないにもかかわらず成立する。
- ④「神戸な人」と「神戸の人」では意味が異なる。「*人が神戸だ」の形がない。
- ④'「*人がスキルだ」及び「*スキルの人」の形がない。

検証方法：

- A) 上表の①～④'の各グループの語の中から数個ずつ選び、「NがXだ」と「XなN」を通時的に電子コーパスで調べる。選ぶ語は「な」と「の」の交替があり、先行文献で指摘されている語が主である。
- B) 「NがXだ」(お姉さんが美人だ)が、「XなN」(美人なお姉さん)に時間的に先行するという結果が得られたら、②のタイプについてはもともと名詞だったものが「属性」と受け取られたため「XなN」という形式が生まれたと考えられる。そして、③④に「NがXだ」という用法がない以上、これらは②とは異なるプロセスによって生じたものと言えるのではないかな。

V. コーパス検証結果

5-1…表2の①の「曖昧のN」の形は14例である。すべて1950年代より前である。

桜井(1964:36)は、「最近⁸⁾の新聞などから「一的の」の用例を拾うことは困難で、「一的な」の方が圧倒的に多い」とし、また、「一の」の形は「一なる」とともに古くからあった。しかし、子どもの口頭語に用いられるほど日常化した「ふしぎ」「たいせつ」「だいいじ」などに「の」をつけることは、現代では異様な感じを受ける」とも述べている。それらは「特殊な表現勝を持つものは、それほど日常化しない漢語に「の」をつけて用いるので、文語的要素で、ときに雅語的である」といっているが、筆者の「現代(2008年－2018年)」では、この「曖昧のN」は、違和感はあるが、文語的にも雅語的にも感じられないものである。

「KOMATSU」には見られず、「青空文庫」のみで用例が見つかった。その一部の例を年代順にいくつか下記に示す⁹⁾。

- (1)「曖昧の答へ」……樋口一葉(1895)
『うつせみ』
- (2)「曖昧の説明」……夏目漱石(1908)
『坑夫』
- (3)「あいまいの返辞」…島崎藤村(1929)
『夜明け前』
- (4)「あいまいの笑い」…海野十三(1937)
『寺田先生と僕』 など

表2 「一な」と「一の」

	語	青空	小松	計	一な	一の	一だ/で
①	曖昧	313	225	538	98	14	56
②	美人	627	177	804	0	196	95
	問題	5105	2548	7653	0	213	1346
	普通	1467	397	1864	14	1207	102
③	満面	64	64	128	0	13	6
④	大人	761	763	1524	0	169	21
④'	スキル	0	0	0	0	0	0

14例のうち、「あいまいの笑い」「あいまいの言い方」「あいまいの態度」の3例が、海野十三（1937）『寺田先生と僕』からの用例である。また「曖昧の説明」「曖昧の点」の2例が夏目漱石（1908）『坑夫』の例、残りの9例はそれぞれ異なる作者の異なる作品からの用例である¹⁰⁾。また「曖昧なN」の形は98例あり、「曖昧のN」の14例と比べると6倍近い差があることがわかった。青空文庫だけに見られる「曖昧な返事／返辞」と「曖昧の返事／返辞」だけを比べてみても以下の結果が出た。

「曖昧な返事／返辞」：22例

(5)「曖昧な返事」(12例)……芥川龍之介（1919）『路上』

(6)「あいまいな返事」(8例)…太宰治（1945）『惜別』など

「曖昧の返事／返辞」：3例

(7)「あいまいの返事」……岡本綺堂（1916）『半七捕物帳』2例

(8)「あいまいの返辞」……太宰治（1946）『庭』

国語学でいう形容動詞であるはずの「曖昧」は、明治時代の小説には、「曖昧の答へ」（樋口一葉（1895）『うつせみ』）等で見られ、

また名詞（以下N）に分類されるであろう「普通」は、「普通な割り合い」（岡本かの子（1936）『鶴は病みき』）等で見ることができる。

青空文庫の中で1950年代以降に書かれたものの中には「曖昧のN」の形は認められなかった。KOMATSUには「曖昧のN」の形は一例も見られなかった。つまり、これらのコーパスを見る限り、「曖昧のN」の「連体ノ形」は1950年代を境に使われなくなっていったと言えるだろう。

以下、「青空文庫」と「KOMATSU」の「な」と「の」を表2をもとに①と②を取り出して、「重要」「穏やか」を加えて作成したものを表3として示す¹¹⁾。

「重要の」は青空文庫では19例、KOMATSUでは4例あった。

青空：19例

(9)「重要な地位」……夏目漱石（1909）『それから』

(10)「重要な武器」……海野十三（1937）『寺田先生と僕』 など

KOMATSU：4例¹²⁾

(11)「重要な議題」……KS1525.txt (679)

(12)「重要な件」……KS1525.txt (682) など

表3 「青空文庫」「KOMATSU」

	語	青空		KOMATSU	
		—な	—の	—な	—の
①	曖昧	120	15	109	0
	重要	150	19	670	4
	穏やか	73	1	21	0
	計	343	35	800	4
②	美人	0	81	0	32
	問題	0	164	0	234
	普通	14	1007	0	205
	計	14	1252	0	471

5-2…「美人な N」、「問題な N」の用例は見つからなかったが、「普通な N」は、14 例あった。このことから、青空と KOMATSU のデータの中では、「普通」が「ナ形」において先行しているといえる。またこの「普通な N」の連体修飾形が現れたのは、すべて青空文庫からの用例である。その一部を年代順に数個、以下に示す。

(13)「普通な容貌」……森鷗外 (1909)『キタ・セクスアリス』

(14)「普通な背たけ」……有島武郎 (1916)『生まれいづる悩み』

(15)「普通な割り合い」…岡本かの子 (1936)『鶴は病みき』 など

これらの「普通な N」の「連体ナ形」も (1) で見たものと同年代であり、すべて 1950 年前の用例である。

青空文庫コーパスと小松左京コーパスの年代差を探ることによって、「ゆれ」の起こる年代が確定できるのではないか。青空文庫は著者の没後 50 年を経て著作権の消滅したものが多くを占める。古くは森鷗外、夏目漱石、芥川龍之介、近くは太宰治 (48 年没)、坂口安吾 (55 年没) などの作品がある。ゆえに、小松左京 (1931 年生誕) との年代差が明確になるのではないかと思われる。

上記の 5-1 と 5-2 の結果からわかったことは以下のことである。

「青空文庫」に見られた「曖昧の N」「重要の N」(用例は上記を参照) の形は、「KOMATSU」になるとほとんど見られない。「曖昧の N」、「重

要の N」の作者は、ほぼ同年代の海野十三¹³⁾、岡本綺堂¹⁴⁾ などである。

5-3…「満面」は、「満面の N」は 13 例だったが、「満面な N」は 0 例であった。「満面の N」の用例を以下に数個書き出す。なお、これらの例はすべて青空文庫からの用例である。KOMATSU からは「満面の N」および「満面な N」は検索されなかった。

(16)「満面の汗」……泉鏡花 (1907)『婦系図』

(17)「満面の笑味」……太宰治 (1940)『女の決闘』 など

5-4…表 2 から得られた「大人¹⁵⁾の N」および「大人な N」の検索結果は、以下の通りである。

青空文庫、KOMATSU のコーパスから、「大人の N」は 169 例みつかったが、「大人な N」は発見できなかった。また「大人の N」の用例としては「大人の声」「大人の社会」などが挙げられる。

また表 1 で提示した「田舎¹⁶⁾の N」と「田舎な N」をコーパスで検索した結果および、④と④'の結果を下記の表 4 に表す。

「大人な N」の検索結果が 0 であったので、「田舎な N」も 0 と予測した。結果は 0 であった。

なお明鏡国語辞典¹⁷⁾の「大人」の項目には、「形容動詞ともみられるが、「大人な」の形はない」と明記してある。

5-5…「スキル」及び「スキルな N」は青空文庫や KOMATSU では検索されなかった。しかし Google で検索したところ、「スキルな

表 4 「N な」Google の例文 (2007 年 1 月 4 日)

		青空文庫	KOMATSU	Google ¹⁾ の上位に見られる用例
④	田舎の	15	73	—— 略 ——
④	田舎な	0	0	「田舎な暮らし」「田舎な縁側」
④'	スキルな	0	0	「スキルな人材」「スキルなエンジニア」
④'	携帯な	0	0	「携帯な毎日」「携帯な人」

N)「スキルな仕事」「スキルな人」等)があった¹⁸⁾。また「携帯な人」でも検索したところ、35件¹⁹⁾見つかった。これは加藤(2003)の言う「俗用としての新しい「な」の用法」が現れたものであろうと思われる。

VI. 「の」と「な」の「ゆれ」についての考察 「ゆれ」には二つある。

1. 「名誉の」「名誉な」「いろいろの」「いろいろな」、などの「の」と「な」の交替があり、意味的にはあまり差がみられないもの。広い意味で「曖昧の」「曖昧な」等も含める。
2. 「神戸な」「ニュースな」「キャリアな」などに代表される純粋な名詞に「な」が付き、常に属性を表すもの。

そしてそれぞれ次のような特徴が見られる。

1. 「XなN」と言った場合、XはNの《属性》を表す。「XのN」と言った場合には、XはNの《属性》を表すものと、《実体》を表すものとが混在する。
2. 「神戸な人」「大人なお酒」「スキルな人材」は「人が神戸だ」「人が神戸に着飾っている」と言えない。Xは常にNの《属性》を表す。

1のゆれは、1950年代頃から一般的に見られたらしい。『言語生活』(1953)20号の「相談室」のコーナーで指摘されている。桜井の論文(1964)はその約10年後である。ゆれが始まった年代の特定は不可能であろうと思われるが、その頃から、ある特定の語に限られるが、「の」と「な」のゆれを見ることができる。

2のゆれは、今回使用したコーパスでは見つけられなかった。見られたのはYahooやGoogleの用例だけであった。今回使用したコーパスとYahooおよびGoogleからの検証結果からに限るが、2000年代半ばには、純

粋名詞に「な」がつくという現象が見られる。本研究では電子コーパスを用い、連体修飾「な」と「の」の使い分けを見ていった。現代日本語には「な」による名詞の連体修飾が増えているといってもいいだろう。特に、話し言葉および雑誌等のキャッチコピーでは、「な」の多用が見られる。「瓜二つなそっくりさん」、「キャリアな女性」、「とっておきな靴の選びかた」、「どんよりな天気」、等、連日聞くことができる。

北原保雄(2005)は『続弾! 問題な日本語』の中で、「問題な日本語」という書名を決めた理由を次のように言う。

「問題な日本語」という書名を決めるときには、いろいろ考えました。そして最後に出てきたのが「問題の日本語」でした。「問題」は名詞で、これが名詞を修飾するときには「問題の」というように「の」を付けるのが普通だからです。ただ、これではいささかインパクトに欠けます。「問題な」とすれば、言語感覚の優れた人には違和感があり、目に留めてもらえるのではないかと考え、「な」に変えたのです。

「問題な日本語」とは、「問題という実体を表す日本語」「問題である日本語」という意味ではなく「問題という属性(～っぽい、～のような)を持つ日本語」という意味なのであろう。

名詞であったものに「な」が付き、そのものが持っている性質を表すようになった。つまり以前は「の」で属性を表していたものについても、「な」を使って性質や属性を表すようになってきた、と言える。

しかしながらこれは新聞や小説などで見ることはまだ少ない。広告や宣伝等で人目を引く「N1+な+N2」の形は、その違和感ゆえのインパクトがある。個々に使われる語彙は変化、推移しても、この形の表現方式は、ある程度は残っていくのではないかと筆者には

思われる。

しかし、表4の「田舎なN」を2019年1月にYahooで検索したところ、数個しか見つけられなかった（「田舎な県」、「田舎なかあちゃん」、「田舎な町」、「田舎な暮らし」…2019年1月3日）。また「スキルなN」も例文としてはNがエンジニアしか見当たらず（「ハイスکیلなエンジニア」、「高スキルなエンジニア」はあったが、これらの語は意味上で形容動詞と同じようになり「な」による修飾も可能となるため、省く）、2007年にはあった「スキルな人」や「スキルな人材」はもう見つけられなかった。さらに「携帯なN」についても同様で、「携帯な人」は検索ができなかった。このことから「N1+な+N2」の形は「一過性である」と言えるが、これは語彙によって差異があるのではないだろうか。それは商品名としての「N1+な+N2」は明らかに増えているからである。以下、例を数個挙げる。

- (18) チーズなあられ（三菱食品）
- (19) 生姜な紅茶（LUPICIA）
- (20) 大人なガリガリ君（AKAGI）
- (21) びっくりなスプーン（貝印）
- (22) 両思いな初絡み（新聞見出し日刊スポーツ 2018年8月7日）

純粋な名詞は実体を表すので、そこにはゆれが見られない（「*本なN」「*先生なN」など）はずではあるが、今後は淘汰されながら増えていくこともあり得るだろう。純粋な名詞が属性を帯びているように捉えられやすくなっていると考えられる。

また「大人なN」の用例は多く、「一なN」は、「大人な味」「大人な城下町」「大人な靴」などに代表されるプラスイメージのもの、ファッション関係のもの、ということがわかった。イメージ先行の業種、個人向けの嗜好性の強い商品の広告などに用いられている。

「ゆれ」が起きているもう一つの理由として、異解釈が考えられるのではないか。形の

似ている「例外だ」と「意外だ」を比べてみると、「例外だ」は「名詞+だ」であるが、「意外だ」は「（いわゆる）形容動詞語幹+だ」である。しかし「大人なN」という形式が見られるようになったことから、「な」が形容動詞語幹から独立したように解釈、認識された結果、「意外な」は元来一語であったのにもかかわらず、「意外+な」と捉えられるようになったのであろう。

つまり活用の一部が分けられたことによって、独自の意味が誕生した。そしてそのルールを当てはめて、多くの「一なN」が出現してきたのだと思われる。

また、今まで検証してきたように「様々」「色々」等の語のほうは、以前は「の」で表されることがあった。それが「な」を用いた形式も増えてきている。「の」で表されていたものが「な」になっているのである。

「一な人」という形の、「健康な人」、「別な人」、「普通な人」、「一流な人」、「ニュースな人」、どこまで逸脱的と言わずに用いられるであろうか。「どんよりな天気」、「大人な靴」、「個人な話」などは、それぞれ「どんより（と）した天気」、「大人っぽい靴」、「個人的な話」の意味であるが、「ナ形」で表されている。一つずつ見ていくと、これらは同じ「XなN」の形をしているが、構造や成立方法が違っているように感じられる。先には「ゆれ」には大きく分けて二つあると述べたが、「XなN」の形の構造が違うからこそ起こるのだといえる。すなわち構造によって「ゆれ」の型も異なってくる。

そして寺村（1986）が挙げている例文の、

(23) アノ男が病氣{ナ/ノ}ハズガナイから考えて、形式名詞がうしろに來た時「ゆれ」が起こりやすい、とは言えないだろうか。「様々」、「色々」、「普通」、「曖昧」などに後続する名詞の特徴を調べるため、「日本語話し言葉コーパス」を用いて前項の名詞を名詞1、後項の名詞を名詞2として多い順にソートをかけた結果、名詞2には形式名詞が多い

ことがわかった²⁰⁾。また、「～のような感じ」として用いられるものも多い。

以上のように「ゆれ」には様々な要因が関係している。

VII. 加藤重広「有名な作家」と「無名の作家」

話し言葉では「な」を多用する傾向もあるようだ。加藤(2001)も「くだけた言い方では名詞の場合でも「な」が現れることが珍しくない」という。「先生はご不在なようだ」「青木君はまだ学生なようだ」などと使われると述べている。そして次の例を出している。

(24) 有名 {*/の/な} 作家

(25) 無名 {の/?な} 作家

(26) この2つを比べてみると「有名な作家」はひどく不自然であるが、「無名の作家」はそれに比べると許容度が高い。現に「無名の作家」を不自然だと思わない人はかなりおり、間違いだと思わない人はさらに多い。これは本来「無名」が「名声を持たない」という意味で《絶対形容》であったものが、「知名度が低い」という意味の《相対形容》として理解されるようになったためだと考えられる。

加藤はこのように述べて、「試しに行なった調査結果」を注に出している。「無名の作家」を、A(間違っている)、B(不自然だが、間違っているわけではない)、C(自然な日本語)の3種類の評価を大学生1年生66名にしてもらったという。結果は、BとCを足して9割を超えていた。これについて加藤は「ある一つの傾向を示している」と言っている。

VIII. アンケート調査

筆者は2006年夏に「有名■作家」「無名■作家」「ふぞろい■食器」²¹⁾で、「な」か「の」を選択するアンケートを取った²²⁾。これらの三つの語を採り上げたのは、加藤(2001:

132)による。「ふぞろい」は「不」を使うことによって起こる「ゆれ」を見るためである。10代から70代まで、主に30代40代を中心に、50名に聞いた。

8-1-1 アンケート調査の方法

①次の1、2、3の■に「な」または「の」を入れる。

1 有名■作家

2 無名■作家

3 ふぞろい■食器

(これらの語は、加藤重広『みんなの日本語教室』P132の例より)

②直感でどちらか一つを選ぶ。両方言える場合には第一印象で選んだもの。

③メールや面接で50人に聞く。

8-1-2 仮説

先行文献から、歴史的には「一的」とした場合、「の」を使うほうが古く、「な」を使うほうが新しいということがわかった。昭和39年の頃には「な」が多く、「の」は文語調であるという。このことから、「一的」という形でもなく、連体修飾の場合に、現在では「な」を使うほうが一般的になりつつあるのではないか。先述の、「高齢な母」や「アジアな味」に違和感を持つ人が少なくなってきていて、若い人ほど、「有名な作家」「無名の作家」「ふぞろいな食器」の記述を選ぶのではないか。

8-1-3 インフォーマントについて

▶ 男性—10人、女性—40人

▶ 10代—7人、20代—5人、30代—16人、40代—18人、50代—3人、60代—0人、70代—1人

※短期間で調査を行なったため、友人に頼らざるを得ず、30代から40代の女性の方が圧倒的に多くなってしまった。

※50人の内訳は、公務員、会社員、主婦、大学院生、大学生、高校生などである。

※調査日：2006年8月20日～25日

8-1-4 調査結果

有名■作家／無名■作家／ふぞろい■食器
の割合→図1

a「有名■」で「有名「な」」を選んだ人数
(50 / 50 人) →図2

b「無名の」:「無名な」:「無名×」の割合 (32:
17 : 1 / 50 人) →図3

c「ふぞろいの」:「ふぞろいな」の割合 (25:
25 / 50 人) →図4

アンケート結果では、全員が「有名■作家」
には「な」を選んだ。しかし「無名■作家」
では 50 人中 42 人が「の」を選んだのに対し、
「な」を選んだ人は 7 人であった。30 代 40
代のみで、中学生・高校生などの若い世代は
8 人中 8 人が「の」を選択した²³⁾。

「ふぞろい■食器」では、50%ずつ「な」
と「の」に分かれた。規範文法的な視点から
みると「無名」に「な」が後述するのは不適
格となり、「の」を用いなければならないだ
ろうが、「な」を使う人もたしかに存在する
ことがわかった²⁴⁾。「の」で表される連体修
飾表現の一部が「な」に移行している、とい
うことは言えるであろうか。

以上を検証するために、2018 年 1 月～12
月に再び同様のアンケート調査を行った。

8-2-1 再アンケート調査の方法

①次の 1、2、3 の■に「な」または「の」を
入れる。

1 有名■作家

2 無名■作家

3 ふぞろい■食器

(これらの語は、加藤重広『みんなの日本語
教室』P132 の例より)

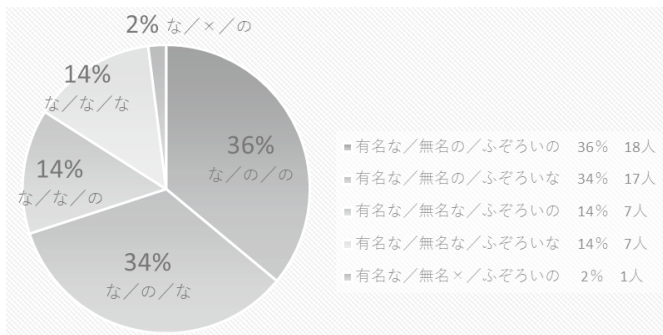


図1：調査結果1



図2：調査結果2

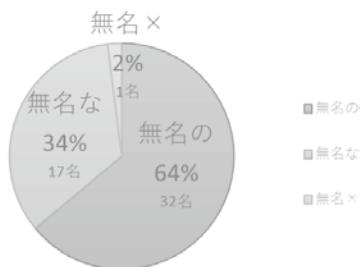


図3：調査結果3

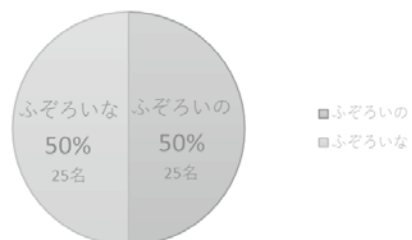


図4：調査結果4

②直感でどちらか一つを選ぶ。両方言える場合には第一印象で選んだもの。

③面接で61人に聞く。

④10年前との差を見る。

b「無名の」:「無名な」の割合 (42:19 / 61人) →図7

c「ふぞろいの」:「ふぞろいな」の割合 (27:34 / 61人) →図8

8-2-2 インフォーマントについて

▶男性—19人、女性—42人

▶20代—15人、30代—10人、40代—14人、50代—4人、60代—5人

※内訳は、日本語教師養成講座の受講生(大学生、教師、会社員、主婦など)である。

※調査日:2018年1月～12月

8-2-3 調査結果

有名■作家/無名■作家/ふぞろい■食器
→図5

a「有名■」で「有名「な」」を選んだ人数
(61/61人) →図6

8-2-4 調査結果

2006年と2018年とではあまり大きな変化は見られなかった。しかし「ふぞろいなN」を選ぶ人が「ふぞろいのN」を選ぶ人より若干増えているという結果が出た²⁵⁾。また「有名な作家/無名作家/ふぞろいな食器」のようにすべて「な」を選択した7人のうち、20代は4人だった。

IX. 結論

「な」は活用の一部であったものが変化してきた、形式が変わってきている、と言えるだろう。つまり「な」自体に意味が出てき始

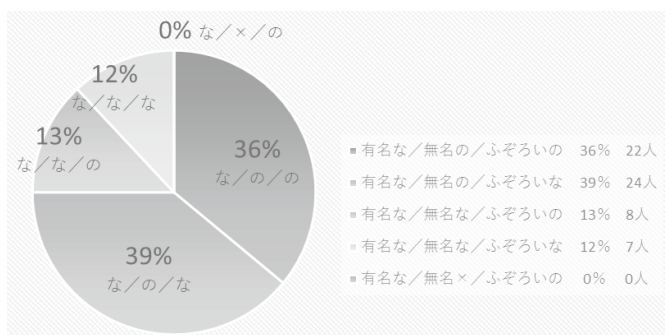


図5: 調査結果5



図6: 調査結果6

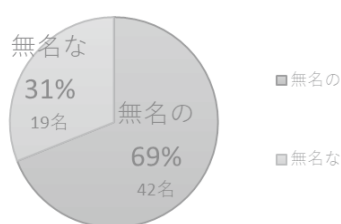


図7: 調査結果7

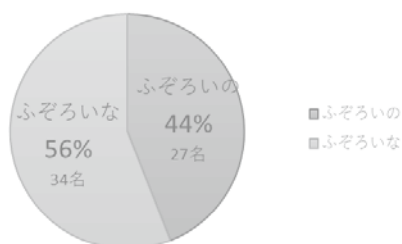


図8: 調査結果8

表5 調査結果 (2006年／2018年)

	2006年 (50人)		2018年 (61人)	
A 有名な作家 / 無名の作家 / ふぞろいの食器	18人	36%	22人	36%
B 有名な作家 / 無名の作家 / ふぞろいな食器	17人	34%	24人	39%
C 有名な作家 / 無名の作家 / ふぞろいの食器	7人	14%	8人	13%
D 有名な作家 / 無名な作家 / ふぞろいな食器	7人	14%	7人	12%
E 有名な作家 / 無名×作家 / ふぞろいな食器	1人	2%	0人	0%

めたのである。そのものが持っている性質を表す「な」が助詞のようにふるまい始めているのかもしれない。すると「形容動詞の語尾」という捉え方ではなく、「名詞」に「辞」を付加して様々な品詞を作るという福田(2005)の考え方に近いが、筆者は属性を表す新たな「準助詞・な」が存在を現し始め、それが生産的に用いられる機能を持ち、多用されるようになったのではないかと考える。

「ゆれ2」の「大人のN」と「大人なN」では意味が異なる。「大人の靴」は「子供用ではなく大人用の靴」の意であるが、「大人な靴」は「大人っぽい・大人の雰囲気のある靴」という意になる。「大人なN」はその属性を表すため、「な」を「大人」の後に要するのである。

いつ頃からゆれが始まり、「な」が多く用いられるようになったのかを正確に知るのは困難である。しかし本稿で検証してきたように、明治・大正時代の作家の文章に見られた「XのN」および「X的のN」(この場合はXは「曖昧」などの語)が、今回用いたコーパスによると、昭和時代(1925)に入ってから減り始め、1950年代にはほとんど見られなくなった。このことから、「XのN」と「X的のN」(Xは「曖昧」などの語)に関しては、次のことが言えるだろう。

1 「の」と「な」の連体修飾の「ゆれ1」は、1950年以降にはほとんど見られなくなった。²⁶⁾

また、「大人」「神戸」「携帯」等の語自体が、「大人」「神戸」「携帯」等の持つ雰囲気・属

性を表面に出し、それを表すようになって後続に「な」を必要とする形式は、今回のコーパス検証からは検出されなかった。ないからといって全くの0(ゼロ)とは断言できないが、2000年以前には見られないものである。

そこで1を次のように言いかえる。

2 「の」と「な」の連体修飾の「ゆれ1」は、1950年以降にはほとんど見られなくなった。「ゆれ2」に関しては2000年以前には見当たらない。しかしテレビやGoogleなどのメディアからの用例により2000年以降には存在すると言えるだろう。

以上、これまでの検証・考察から次のことが言える。表1の②のタイプについてはもとも名詞だったものが「属性」と受け取られたため、「XなN」という形式が生まれたと考えられる。そして、③④に「NがXだ」という用法がない以上、これらは②とは異なるプロセスによって生じたのではないか。③④は属性という状態・性質が名詞に後から与えられた解釈だと結論付けられる。

X. 今後の課題

今後の課題としてまず、この連体修飾の在り様をさらに調べていくことを挙げたい。複数のコーパスでもっと時代を遡り明治初期の連体修飾を調べることが必要である。また2000年以降に出版された書籍や、あるいは生年が1980年代後半の若い作家たちの作品には、「ーな」を用いた連体修飾形、たとえば「大人なN」や「さすがなN」などが現れ

ているのではないかと思われるので、引き続き検証を行っていくことが今後の課題になると思われる²⁷⁾。さらに本研究で明らかになった、「な」の助詞のようなふるまいをする機能を引き続き調べていく。

また本論文では詳しく調査していない、否定辞が付いたときの語構成や変化について、さらに1950年以前にゆれを見せた形式と違う形式が1950年以降にゆれを見せているという可能性はないか等、さらに継続的に検証・研究していくことが、これからの課題である。

宮地宏ほか「修飾」『外国人のための日本語
例文・問題シリーズ17』1991 荒竹出版
村木新次郎「「神戸な人」という言い方とそ
の周辺」『表現と文体』2005 明治書院
吉村弓子「造語成分「不・無・非」」『日本語
学』1990 12月号 明治書院

主要参考文献

- 宇野義方『言語生活』20号 相談室1953
筑摩書房
奥津敬一郎「連体修飾とは何か」『日本語学』
2004 3月号 明治書院
影山太郎『文法と語形成』日本語研究叢書〔第
2期第4巻〕2002 ひつじ書房
加藤重広『日本語修飾構造の語用論的研究』
2003 ひつじ書房
加藤重広「チャレンジコーナー」『月刊言語』
2003 5・6・7月号 大修館書店
加藤重広『みんなの日本語教室』2001 三笠
書房
北原保雄『続弾！問題な日本語』2005 大修
館書店
京谷美代子「連体修飾「な」と「の」の修飾
構造と機能」麗澤大学大学院修士論文
2007
桜井光昭「「名誉の」と「名誉な」」『口語文
法講座3』1964 明治書院
寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味 第Ⅰ
巻』1986 くろしお出版
西山佑司「名詞句の意味と連体修飾」『日本
語学』2004 明治書院
西山佑司「NP1のNP2」と“NP2 of NP1”『日
本語学』1994 VOL.12 明治書院
福田有美「日本語否定接辞と漢字造語力考」
『筑波大学外国語教育論集第27号』2005

資料 1

辞書による品詞表示の違い一覧

	明鏡 国語辞典	大辞林	広辞苑
重要	形容動詞	名詞・形容動詞	名詞
曖昧	形容動詞／名詞	名詞・形容動詞	名詞
穏やか	形容動詞	形容動詞	名詞
美人	名詞	名詞	名詞
問題	名詞	名詞	名詞
普通	名詞・形容動詞／副詞	名詞・形容動詞／副詞	名詞
満面	名詞	名詞	名詞
とっておき	名詞	名詞	名詞
大人	名詞	名詞	名詞
田舎	名詞	名詞	名詞

名詞・形容動詞…（名詞・形容動詞）と表記されているもの

形容動詞／名詞…☐一形容動詞 ☐二名詞と表記されているもの

- ・明鏡国語辞典の「大人」の項目には次の文が見られる：

「②思慮、分別があるさま。「君ももっと一になりなさい」②は形容動詞ともみられるが、「大人な」の形はない」

- ・上記のうち「重要」と「曖昧」についてはゆれが見られる。他の辞書での品詞表示の違いは以下の表になる。

	明鏡国語辞典	大辞林	広辞苑	大辞泉	新編大言海
重要	形容動詞	名詞・形容動詞	名詞	名詞・形容動詞	名詞
曖昧	形容動詞／名詞	名詞・形容動詞	名詞	名詞・形容動詞	名詞

- ・明鏡国語辞典 初版第二刷 2003 大修館書店
- ・大辞林 第三版 2006 三省堂
 - ・「名詞には原則として品詞の表示を省略した」とある。表示のない語については、名詞として記載した。
- ・広辞苑 第五版第一刷 1998 岩波書店
 - ・「名詞および連語には、原則として品詞の表示を省略した」とある。表示のない語については、名詞として記載した。
 - ・『日本文法概説』に従い、「本書における見出しは語幹だけを示し、品詞表示も見出しの形式に合わせて名詞と同様に扱う」とする。
- ・大辞泉 増補・新装版 1998 小学館
- ・新編大言海 1988 富山房

資料2

「日本語話し言葉コーパス」結果

前項の名詞を名詞1、後項の名詞を名詞2として多い順にソートをかけた結果、数の多い順にそれぞれ並べる。

名詞1

1	よう	4821
2	的	3923
3	重要	528
4	さまざま	326
5	必要	274
6	いろいろ	250
7	多様	159
8	豊か	134
9	こと	126
10	有名	121

名詞2

1	の	1394
2	もの	1203
3	こと	723
4	意味	162
5	人	162
6	問題	150
7	形	134
8	場合	124
9	社会	122
10	人間	115

名詞1の特徴：

- よう（～よう＋な）、的（～的＋な）が非常に多いことが挙げられる。
- 寺村が「名詞的形容詞」としている「いろいろ」、それに準ずるであろう「さまざま」も多い。

名詞2の特徴：

- 形式名詞が多い。「の」「もの」「こと」など。
- 「気」は12位（109例）。「感じ」は17位（89例）。50位は「要素」（49例）。

注

- 1) 加藤 (2001:132) 『みんなの日本語教室』の例文より。2006 年と 2018 年に同様のアンケート調査を行った。
- 2) 本編は、麗澤大学大学院・平成 18 年度修士論文「連体修飾「な」と「の」の修飾構造と機能」を加筆修正したものである。
- 3) 明治時代から昭和初期までの作家の著作を集めたもの。著者の没後 50 年を経て著作権の消滅したものが多くを占める。2002 年版「青空文庫 CD-ROM 版」データを使用。
- 4) 日本語教育支援システム研究会 (CASTEL/J) CD-ROM ミレニアム特別版のテキストデータ (CASTELJ2000 フォルダ) である。これには小松左京コーパス作成委員会によって作成された「小松左京作品」1374 作品が収録されている。小松左京は昭和 6 年 (1931) 生まれである。
- 5) おそらく「の」と「な」のゆれについての最初の文献だと思われる。
- 6) 例)「戦国的勇壮なるローマン風のものにて」(北村透谷『徳川時代平民的思想』)
- 7)「最下位のチーム」は絶対形容である。程度を表す副詞と共に起しない。「*かなり最下位なチーム」とはならない。
- 8) 1964 年当時であろう。
- 9) 詳しくは表 3 を参照。
- 10) また、この 14 例のうち 2 例の「あいまいの度」という用例があった。これは「あいまいさの度合い」というほどの意味であろうと思われるので、省くことにする。
「あいまいの度……岡本かの子 (1936)『鶴は病みき』
「あいまいの度」……太宰治 (1945)『津軽』
- 11)「重要なのだ」および「重要なんです」またそれに準ずるものを除く。また、「穏やかなの」の例は以下の 1 例のみであった。「フランス側でも穏やかなような、鋭いような、ぶきみきわまりないあの目 (jou.txt (222))
- 12) 5 例目の「重要のようにおもわれます」は省いてよいだろうと思われる。
- 13) 海野十三 (1897 ~ 1949) 徳島市生まれ
- 14) 岡本綺堂 (1872 ~ 1939) 東京都高輪生まれ
- 15)「大人」と共にひらがな表記の「おとな」も含める。以下同様。「大人 (たいじん)」と判別できるものは省いた。
- 16)「田舎」と共にひらがな表記の「いなか」も含める。以下同様。
- 17) [資料 1] を参照のこと。
- 18) Google 検索で出た最初の 100 の「スキルな」のうち、47 が「スキルな + 名詞」の形。(11/07/2006)
- 19) Google 検索 (01/04/2007)
- 20) [資料 2] を参照のこと。
- 21) 加藤 (2001:132) 『みんなの日本語教室』の例文より。
- 22) 社会学的調査として行ったものではない。主として「無名な作家」が使用されているかどうかをみるためのものであった。口頭・電子メールでおこなった。
- 23) 若い人ほど「な」を選ぶ傾向があるかと思われたが結果は違った。
- 24) 気づいた点やコメント：
 - ①十代は「な」を多用すると思ったが、意外に、「有名な作家／無名の作家／ふぞろいな食器」のパターンを選んだ人が多かった。
 - ②すべての■に「な」を選んだ人は、30 代 2 人、40 代 5 人の女性であった。
 - ③「ふぞろいの食器」を選んだ人たちは、約 20 ~ 30 年前のテレビドラマのタイトル、「ふぞろいの林檎たち」を挙げる人が多かった。
 - ④個別に聞いた人もいれば、数人にいっぺんに見せた例もあるので、周りの人に引きずられたケースもあるかもしれない。
 - ⑤また次のようなことを言う人もいた。「三つの文が並んで書いてある紙を差し出さ

れると、一つくらいは違うものを選ばなくてはならないような気になる」

- 25) 2018 年の調査において日本語教師養成講座の受講生の中に、現役の外国人日本語教師が 6 名いた。規範文法を学んできた中国人日本語教師からは「不ぞろい」と「の」は共起しないのではないか、との意見が出た。
- 26) 唯一の例外は、北杜夫（1927 年～ 2011 年 東京都港区出身）ただ一人である。
- 27) 2018 年第 158 回芥川賞「百年泥」（石井遊佳（1963 年生まれ）著）、直木賞「おらおらでひとりいぐも」（若竹千佐子（1954 年生まれ）著）、第 159 回芥川賞「送り火」（高橋弘希（1979 年生まれ）著）、直木賞「ファーストラヴ」（島本理生（1983 年生まれ）著）、第 39 回野間文学賞受賞／2018 年本屋大賞ノミネート「星の子」（今村夏子（1980 年生まれ）著）、以上 6 冊の中から 1 例見つけた。ただ否定辞「無」を冠しているので言い切ることが少し難しい。「豊かな言葉、なら分かるが、沈黙は無言なわけで、無言が豊かとはどういう意味だろう。」「送り火」p53